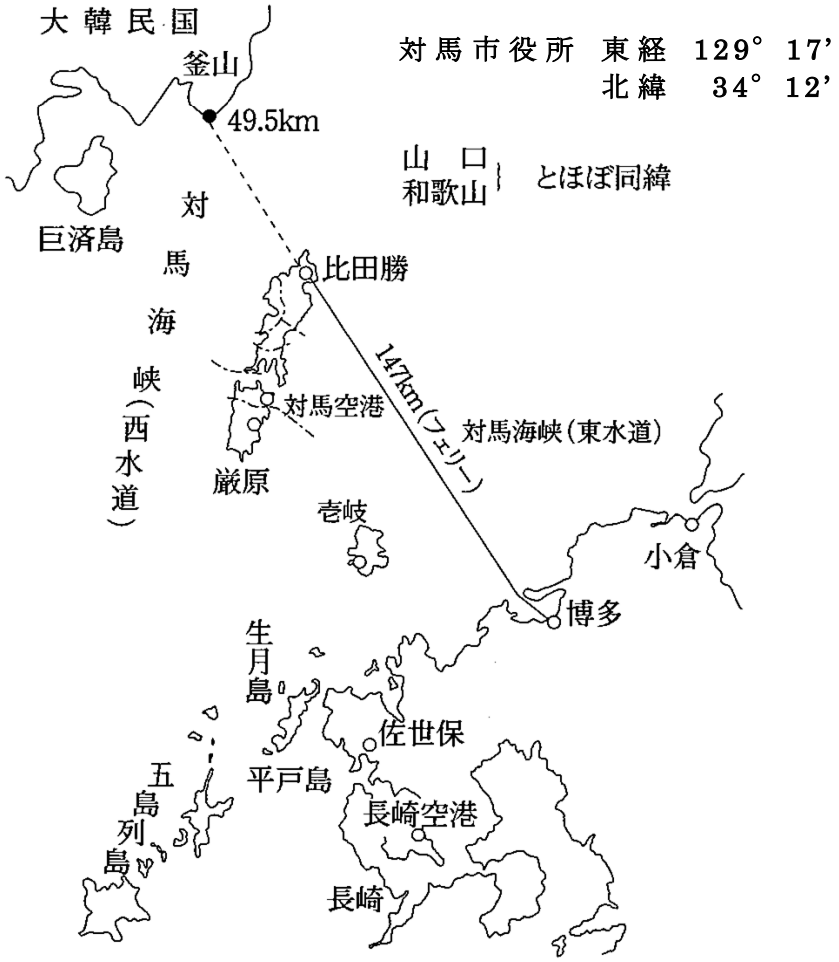
○対馬から博多まで海路 147ｋｍ、釜山まではその半分以下、49.5ｋｍの近さにある。
○気温は、長崎より平均 1～2 度低い。特に、冬の季節風は厳しい。
○南北 82ｋｍ、東西 18ｋｍの細長い島、海岸線の長さは 915ｋｍにも及ぶ。
○全島 200～300ｍの山岳が連なり、ソロバン玉状を呈している。
○山林が 89％を占め、耕地 1％、宅地 1％と平地に乏しい。
○島しょ数は、対馬島本島を除き 107、うち有人島 5。
○地理的特殊性により、対馬特有の生物や大陸系の生物が数多く生息する。

第３-１図　対馬の位置



第１節　対馬の位置

対馬は、日本海の西に浮かぶ島である。北は朝鮮海峡を隔てて朝鮮半島に対し、南は対馬海峡を隔てて壱岐島、九州本土に面している。

位置は、北端で北緯 34 度 43 分、南端では北緯 34 度 5 分で、北端は大阪、南端は和歌山付近の緯度に相当する。

また、経度では、東端で東経 129 度 30 分、西端で東経 129 度 10 分に位置する。

対馬（厳原）から福岡まで、海路（フェリー）138ｋｍである。壱岐は、対馬と福岡のほぼ中間に位置している。一方、対馬から釜山までの最短距離 49.5ｋｍ。朝鮮半島は、九州本土に比べ、半分以下の近距離にある。このため、対馬から隣国の韓国を見ることができる日よりも、日本本土が見える日は少ない。このような地理的条件のため、大陸との交流において、対馬は重要な役割を果たしてきた。

第２節　対馬の気候

1．概況

対馬は、暖流である対馬海流に囲まれた島ではあるが、大陸からの冷たい季節風のため、秋から初春にかけては冷え込むことが多い。

春は大陸からの季節風に乗ってやってくる黄砂に始まり、九州本土よりやや遅れて桜の開花が始まる。しかし、対馬の春はまだ肌寒く、セーターを脱ぐのは少し遅れる。

梅雨は、本土より雨量はやや多いものの、じめじめした梅雨特有の不快な日は少なく、その期間も短い。

夏の対馬はしのぎやすい。気温は本土よりやや低めであるのに加えて、九州本土に居すわる太平洋高気圧のすみに位置するため、日照時間も九州本土よりやや短い。対馬の夏のしのぎやすさの他の要因としては、海風により地中に熱がたまらないことが考えられる。

秋は９月の台風シーズンに雨量が多いが、台風が対馬を直撃すること

がほとんどないため、台風による直接的な風水害はあまりみられない。10月頃より雨量が少なくなり、晴天の日が多くなる。

冬は大陸からの北西の季節風が冷たい空気を運ぶため寒冷な日が多く、特に夕方の冷え込みは厳しい。しかし、この時期は最も雨量の少ない時期であり、しかも海に囲まれているため、雪はほとんど降らず、たまに降っても積雪は珍しい。

2．気温・湿度

気温は、最高、最低、平均気温ともに年間を通じて長崎より1～2度低い。 夏は過ごしやすく、冬は厳しいということになる。ちなみに過去の最高気温は 36.6度（平 25.8.20)で、最低気温は零下 8.6度（明 28.2.22)である。

湿度は、夏から秋の期間を除けば長崎よりも低く、特に冬期には、雨量の少ないこととあいまって空気はかなり乾燥しており、乾いた空気が肌をさす。

3．雨量

年間の雨量は、長崎よりやや多い。時期的には4月から9月にかけてがピークであるが、11月から2月の冬期には極端に降水量が少ない。また冬期には、日照時間は本土に比べかなり長くなり、湿度も低くなる。即ち冬枯れの状態になりやすい。

4．風

対馬の気候に最も影響を及ぼしているのは、大陸からの季節風である。この季節風が「暖流の中に浮かぶ島」対馬の暖かいイメージを一掃し、風が強くて冷たい島としている。またこの季節風は、春には黄砂を運ぶ。

この季節風の影響で、年間の風向は北北西、年平均風速は 3.0（m/s）である。

第３節　対馬の地勢等

１．概況

対馬は、南北約 82ｋｍ、東西約 18ｋｍの細長い島である。海岸は、沈降と隆起によって出来たリアス式海岸であり、その総延長は実に 915ｋｍである。対馬は、全島の 89％が山林で覆われ、峻険な深い山が連なり、標高 200ｍ～300ｍの山々が海岸までせまっている。このため、海岸はところによっては高さ 100ｍにも及ぶ断崖絶壁を呈しており、海流と荒い波の影響を受け、砂浜の数は少ない。対馬を上下に分断する浅茅湾は、リアス式海岸の特徴を顕著にあらわし、大小無数の入江と島々からなるその姿は、西海国立公園の九十九島にも勝るとも劣らない対馬の景勝地の一つとなっている。

地質的にみると、本島は大部分が第３紀の堆積岩からなり、これを貫いて火成岩が南部の高地（厳原町内山周辺）を形作っている。

２．山岳

対馬における最高峰は、厳原町の南部（佐須と内山に連なる）にある標高 649ｍの矢立山である。竜良山（厳原町）及び白嶽（美津島町）の千古の原始林は神秘な気配を漂わせ、国の天然記念物に指定されている。また上県町中部にある御嶽（平岳 458ｍ）は、オジロワシの渡来する山として知られ、「御嶽鳥類繁殖地」として同じく国の天然記念物に指定されている。

第３－１表　対馬の主な山岳

山岳	標高　ｍ	所在地
矢立山（やたてやま）	△　648	厳原町
大鳥毛山（おおとりげやま）	●　555	〃
竜良山（たてらやま）	△　559	〃
有明山（ありあけやま）	△　558	〃
舞石ノ壇山（めいしのだんやま）	△　536	〃
白嶽（しらたけ）	●　518	美津島町
萱場山（かやばやま）	△　516	厳原町
木槲山（もっこくやま）	△　515	〃

△三角点　●標高点　　第 61 版長崎県統計年鑑（平成 26 年版）

3．河川

対馬の河川は、地形的な関係でほとんどが急流河川であり、流路延長も短く流域面積の狭い小河川が多い。地層の傾斜は、東海岸に面する部分が急で、西海岸は、比較的緩やかである。このため、中央縦走山脈の分水嶺は東に偏っており、河川の比較的大きなものは、西沿岸に集中している。このようなことから、台風等集中的な豪雨の際には、いわゆる鉄砲水による被害が続出する場合が多い。

4．島数

対馬は、本島及び107の小島から形成されている。有人島は、対馬島（本島）、島山島、沖の島、赤島、泊島、海栗島の計6島であるが、海栗島を除き、本島と各島は橋等で結ばれ陸続きとなっている。なお、本県における島しょ数は、有常住者が72、無常住者が522である。（第61版長崎県統計年鑑(平成26年版)）

第3-2表　有人島内訳

（平25.10.1）

島名	面積（平方キロ）	世帯数（戸）	人口（人）
対馬島	697.293	13,762	34,230
島山島	4,900	12	30
沖の島	2,660	12	21
赤島	0.480	22	46
泊島	0.100	4	10
海栗島	0.089	1	70
計	705.522	13,813	34,407

第61版長崎県統計年鑑(平成26年版)

（注）1.沖の島には、住吉大橋が昭和46年6月に建設された。

2.赤島には、赤島大橋が昭和55年3月に建設された。

3.海栗島は、航空自衛隊関係者のみである。

4.島山島には、浅茅パールブリッジが平成6年11月に建設された。

5.世帯数、人口は平成22年10月1日現在（平成22年国勢調査）

5．土地利用状況

対馬の土地利用状況の特色としては、全島の約89%が山林で占められていることがあげられる。

耕地率はわずか1.3%で、本県離島の中で最も低い。

また、この耕地部分も、15度以上の急傾斜地がそのうち約4分の1を占めている上、分散度も大きい。

島内での主な耕地部分は、佐護地区（上県町）、仁田地区（上県町）、佐須地区（厳原町）等であり、全体で915ｈａである。（第61次農林水産統計）

一方、壱岐の耕地面積は3,850ｈａ（同年報）であり、島の面積では対馬の5分の1であるにもかかわらず、対馬の4.2倍の耕地を有していることになり、両島の立地条件ないしは土地利用の相違がわかる。

第4節　対馬の動植物

対馬には、ここでしか見ることのできない生物や、大陸の流れをくむ生物が数多く生息する。これは、日本本土から隔絶された“島”という特殊環境下にあること、また距離的にアジア大陸に非常に近く、かつては大陸と陸続きの時代もあったという地理的、歴史的特異性によるものと考えられる。

1．動物

･ツシマテン（イタチ科）

ホンドテンの別亜種で、島という特殊な環境に隔離されて進化したものである。頭胴長約40～45ｃｍ、尾長17～20ｃｍ。夏は黒茶色であるが、冬になると土地の人が「ワタボシカブリ」と呼ぶように頭部が灰白色、他の部分は黄褐色となる。昭和46年、国の天然記念物に指定。対馬だけに生息している。

・ツシマヤマネコ（ネコ科）

イリオモテヤマネコとともに国内に生息する２種のヤマネコのうちの１種で、対馬にのみ生息する。昭和 46 年に国の天然記念物に指定された。

イエネコとほぼ同じ大きさで（生体で頭胴長 60～65ｃｍ、尾長 25～30ｃｍ）、丸い耳先（イエネコはとがっている）、耳の後ろの白い斑紋、眉間の縦縞と胴体の斑点が特徴である。

生息環境の変化に伴う生息域の減少、交通事故の発生、イエネコからの病気感染等で、現在の野生個体群は非常に危機的な状況にあり、昭和 40～43 年の調査で 250～300 頭はいたとされるが、平成 22～24 年に行なわれた環境省・長崎県の調査では 70 又は 100 頭に減っていると推定されている。なお、同調査においては、上島ではほぼ全域で生息が確認され、南部にも分布が拡大している。一方、下島では平成 19 年３月に厳原町内山地区に設置された生息調査用の自動撮影カメラに写り、昭和 59 年以来、23 年ぶりに生息が確認されたほか、平成 21 年 12 月には厳原町小浦で亜成獣１頭が保護された。その後、下島北部を中心に痕跡（糞）、自動撮影カメラ等による確認があったものの、生息情報は極めて少ない。美津島町大船越では平成 26 年 12 月に交通事故死体を回収し、下島においても交通事故対策の必要性が再認識された。

保護対策として、平成元年度に上県町伊奈地区に国設鳥獣保護区が設定され、平成６年３月には「絶滅の恐れのある野生動植物の種の保存に関する法律」に基づく保護対象種（希少種）の指定第１号になった。さらに平成９年７月には、ツシマヤマネコを中心に対馬の野生生物保護・研究拠点として、上県町棹崎公園内に対馬野生生物保護センターが設置され、平成 15 年 12 月にはツシマヤマネコの一般公開が開始された。また、平成 27 年３月に舟志ノ内鳥獣保護区及び同特別保護地区が国指定とされ、ツシマヤマネコの生息環境の維持回復のため、ツシマジカの生息数管理及び植生保全の手法が現在検討されている。

環境省は、生息域外での種の保存を目指して、平成 11 年から福岡市動物園で飼育下繁殖を開始し、平成 12 年４月に我が国で初めて仔ネコ

が生まれた。県内では平成22年から西海国立公園九十九島動植物園で飼育が開始され、現在福岡市動物園と併せて飼育下繁殖の第一拠点施設として取組がなされている。

また、飼育下個体群の危険分散等を目的として、全国各地の以下の動物園等で飼育が行われている。平成18年～東京都井の頭自然文化園（東京都）及び横浜市立よこはま動物園（神奈川県）、平成19年～富山市ファミリーパーク（富山県）、平成23年～盛岡市動物園（岩手県）、名古屋市東山動植物園（愛知県）及び沖縄こどもの国（沖縄県）。

平成28年1月現在、盛岡市動物公園で1頭、東京都井の頭自然文化園で4頭、横浜市立よこはま動物園で3頭、富山市ファミリーパークで2頭、名古屋市東山動植物園で4頭、京都市動物園（京都府）で4頭、福岡市動物園（福岡県）で9頭、西海国立公園九十九島動植物園（長崎県）で6頭、対馬野生生物保護センターで1頭、沖縄こどもの国で1頭、計35頭を飼育している（一時的な保護個体を除く）。

さらに、環境省は、これらの動物園等で繁殖した個体を島内で野生復帰させるための訓練施設として、平成23～26年度に厳原町「鮎戻し自然公園」の一部にツシマヤマネコ野生順化ステーションを整備した。第1次ツシマヤマネコ野生復帰技術開発計画に基づき、平成28年3月より近似種（イエネコ）を導入し、施設・設備の確認及び体制の検討を行っている。

･ツシマジカ（シカ科）

対馬だけに生息する。対馬のシカは、かつては独立種とされたこともあったが、現在は分子遺伝学的にホンシュウジカ（特に中国地方産）と極めて近いとされている等、諸説ある。キュウシュウジカより少し大型で、角の長さも50ｃｍを越えるものがある。昭和41年、県は天然記念物に指定し全島で捕獲が禁止されたが、その後数も増えシカによる植林木等への被害も見られるようになったことから、昭和58年、美津島町尾崎半島の一部（306ｈａ）をツシマジカ生息地として地域指定の天然記念物に変更、更に絶滅の危険性なしと判断され、平成16年3月末で地

域指定も解除された。近年、自然植生や農林業における被害が拡大しているため、県としても捕獲を実施し、生息数管理に努める方針である。

･チョウセンイタチ（イタチ科）

ホンドイタチよりやや大型で尾が長い。冬毛は黄土色、夏毛は茶色で口もとから下顎にかけて明らかな白斑がある。本来、朝鮮と日本の対馬にのみ分布するものであったが、昭和5年頃、本土に移入されたものが逃亡し、関西、四国、九州などで野生化、繁殖し、徐々にホンドイタチを駆逐し生息域を広げつつある。

･タイシュウバ

日本在来馬の一種であるタイシュウバは、体高が約125ｃｍの小さな馬で、力が強く、耐久力に富む。対馬の荷運搬・農耕に貢献してきたが、昭和40年以降、飼養頭数が減少し、平成27年4月1日現在の島内の飼養頭数は34頭となっている。現在、対馬市と対州馬保存会を中心に、その活用と振興が図られており、平成14年には、40年間途絶えていた伝統行事である「馬跳ばせ」が「初午祭」として復活し、毎年10月に開催されている。

対馬市では、平成16年に上県町瀬田地区に目保呂ダム馬事公園（乗馬体験施設）を開設し、体験型観光施設として運営している。

･ツシマサンショウウオ（サンショウウオ科）

体長9～13ｃｍ。対馬各地の河川に生息する。関西以西に多いカスミサンショウウオと朝鮮に分布するチョウセンサンショウウオの中間的性質を有し、特に流水域に産卵することが大きな特徴である。対馬だけに生息する。

・ツシマウラボシシジミ（シジミチョウ科）

国内では対馬のみに生息する固有亜種。国外の分布も台湾、中国、インドシナなどで、朝鮮半島には分布しておらず、対馬は隔離された分布

地であり、より遺存的で固有性が高いと考えられる。多化性で、5～10月に小川沿いの薄暗いスギ林等の林内やその周辺部で見られる。後翅裏面は地色が白で、前角に近いところに大きい黒円紋が目立つ。雌の翅表は一様に黒褐色であるが、雄は外縁が黒帯で中が強い青紫に輝く。

近年、シカ等の食害により食草が減少し乾燥化も進み、マニアによる捕獲圧もかかり、個体数は激減した。平成27年5月に県の条例で希少野生動植物種に指定され、捕獲は禁止されている。

かつての生息地では対馬市や地元住民が主体となり保護区を設け、環境省や県との協力体制の下、保護増殖を図っている。

このほか、対馬だけに生息する動物に次のようなものがある。

ツシマヒミズ（モグラ科）、ツシマアカネズミ（ネズミ科）、ツシマカヤネズミ（ネズミ科）、ツシマヒメネズミ（ネズミ科）、ツシマスベトカゲ（トカゲ科）、ツシママムシ（クサリヘビ科）

また、大陸系の動物で、日本では対馬だけに分布するものに次のようなものがある。

ツシマクロアカコウモリ（ヒナコウモリ科）、チョウセンコジネズミ（トガリネズミ科）、チョウセンモグラ（モグラ科）、アカマダラ（ナミヘビ科）、アキマドボタル（ホタル科）

一方、日本本土では、極めて普通にいるタヌキやノウサギ、イモリなどが対馬には全く分布せず、対馬の生物相の不思議さを物語っている。

鳥類については、対馬だけに生息するものは見られないが、渡り鳥の中継地であること、地理的に大陸に近いことなどもあって、世界でも有数の野鳥観察地とされている。

・ヤマショウビン（カワセミ科）

全長約28ｃｍ。赤い大きな嘴が特徴的。体色は頭上の黒、背と尾の

紺色、翼の白色、それに腹部の橙黄色などが見事に調和し非常に美しい。

中国大陸、マライ諸島などに分布する。日本では迷鳥として記録されるが、対馬や琉球諸島では毎年観察されている。

・アカハラダカ（ワシタカ科）

全長約 30ｃｍ。同じワシタカ科のツミ（♂）に似るが脚が短い。頭上から背面にかけて暗青灰色。腹側は白で、胸部は黄赤褐色。

中国大陸、台湾などで繁殖し、冬季、北方のものはマレー諸島、ニューギニアなどの南方へ渡る。日本では、対馬・佐世保市等で毎年９月中旬渡りの途中のものが観察されている。厳原町内山峠には展望台が設置されており、１日で数万羽が観察されたこともある。

・ヤツガシラ（ヤツガシラ科）

全長約 26ｃｍ。体の上半部は肌色、翼は白と黒のしま模様。頭上には長い冠羽があり、地上に降りた時、なにかのはずみにこの冠羽を逆立てる。

中国大陸で繁殖する。冬季には南方へ渡るが、日本ではこの渡りの途中、旅鳥として観察されている。

･ミサゴ（ミサゴ科）

オスは全長約 55ｃｍ、メスは約 63ｃｍで、トビと同程度の大きさ。背と翼の上面は暗褐色であるが、飛翔時は頭頂部と翼下面や腹部の白色が目立つ。

一般に海岸や河畔付近などに生息するが、海に囲まれた対馬では比較的普通に見られる。魚を捕食するタカとして知られ、対馬ではビシャと呼ばれる。

・シマノジコ（ホオジロ科）

全長約 13.5ｃｍ。頭から背、腰、のどから胸が赤褐色で、腹は黄色。

中国東北地区北部付近で繁殖し、冬は東南アジア付近で越冬する。国

内では稀な旅鳥であるが、対馬ではほぼ毎年、春の渡り時期に見られる。

・コウライキジ（キジ科）

体形はキジによく似ているが、羽色に違いがある。オスは、全体が黄褐色で首に白い輪がある。メスは、キジに比べて白っぽい。対馬での放鳥の歴史は古く、江戸時代後期にさかのぼる。他の生息地（北海道・壱岐他）は、昭和になって放鳥されたものである。いずれも朝鮮半島産と同一亜種である。対馬の代表的な鳥類の一種で、対馬市の「市の鳥」である。

2．植物

○春の花

・ゲンカイツツジ（ツツジ科）

日当たりのよい山地に生える高さ 1～3ｍの落葉低木で、群落をつくる。 開花時期は 3 月で、山のあちこちでピンクの花を咲かせる。本州・九州・朝鮮半島・済州島などに分布しているが、対馬では山地部だけでなく、海岸にまで生えており、水面に写るその姿は美しい。また、対馬市の「市の花」である。

・ヒトツバタゴ（モクセイ科）

高さ 15ｍ、径 70ｃｍにも達する落葉高木。台湾や中国大陸に分布し、日本では上対馬町鰐浦一帯と中部地方の木曽川流域のみ生える。5 月頃、4 つに深く裂けた長さ 1.5～2.0ｃｍの白い花を樹冠全体につけ非常に美しい。鰐浦では入江を囲む山の斜面に多く、花期ともなると静かな海面を真っ白に照らし出す。この様子から、地元ではウミテラシとも呼んでいる。昭和 3 年、鰐浦地区は、ヒトツバタゴ自生地として国の天然記念物に指定されている。また、対馬市の「市の木」である。

･ウスギワニグチソウ（ユリ科）

世界中で対馬と朝鮮南部でしか見られず、非常に分布域の狭い植物で

ある。日当りのよい山の草原に生える。高さは 20～40ｃｍ。葉は楕円形で長さ 3～5ｃｍ。5 月、長さ 13ｍｍ程度の筒型をした黄緑色の花をつける。

○夏の花

・ハクウンキスゲ（ユリ科）

日本では対馬のみに分布し、日当りのよい草地、あるいは岩上にも生える。高さは 70ｃｍ程度になり、梅雨頃から長さ 8～9ｃｍの橙黄色の花を開く。尾瀬沼などに生える有名なニッコウキスゲと同じ仲間（ワスレグサ属）である。以前はかなり大きな群落も存在したが、イノシシやシカの食害により減少している。

・オオチダケサシ（ユキノシタ科）

中国やヒマラヤなどに分布する大陸系の植物で、日本では対馬にだけ生育する。高さは 50～70ｃｍ。7 月から 8 月にかけて、淡紅紫色から紅紫色の花をつける。主にシカの食害や河川改修により生育数が減少している。

・ハナナズナ（アブラナ科）

大陸系の植物で、日本では本州（中国地方）、対馬でしか見つかっていない。高さ 20～40ｃｍ。海岸に近い、やや乾燥ぎみの崖地を好んで生育し、7～9 月に淡紅色の小さな花をつける。

近年、中国地方では報告がないため、対馬のものは貴重である。これまで対馬島内で確認されている自生場所は数ヶ所あったが、シカの食害で激減した。

○秋の花

・ツシママママコナ（ゴマノハグサ科）

対馬で最初に見つかったので、この名がある。事実、対馬各地の路傍や林のふちなどで極めてよく見かける。紅紫色の花ママコナは「飯子菜」

で、花の下部内面にある白斑を飯粒に見立てたものとか、種子が米粒にそっくりなことによるという。高さは 20～50ｃｍ。晩夏から初秋にかけて、長さ 14～18ｍｍの紅紫色の花をつける。

･ダンギク（クマツヅラ科）

大陸系の植物で、日本では長崎県と鹿児島県の一部にのみ分布するが、対馬では全島でごく普通に見られる。高さ 10～60ｃｍ。秋、美しい紫の花が茎を囲むようにつき、それが段になっているのでダンギクの名がある。秋の対馬を彩る名花のひとつである。

･シマトウヒレン（キク科）

対馬の特産種。茎は高さ 50ｃｍ前後。葉は長さ、幅とも 9～10ｃｍの卵状三角形で、上部の葉ほど次第に小型となる。9～10 月、アザミの花を細くしたような径 1ｃｍ前後の紅紫色の花をつける。シカの食害により危機的状況にある。

･ツシマギボウシ（ユリ科）

対馬にだけ生育するギボウシ。陽が差し込む樹林内や林の縁などで見られる多年草。8 月から 9 月にかけて、紫色の花をつける。

・ツシマノダケ（セリ科）

朝鮮半島南部と対馬にのみ分布。8 月～10 月、薄暗い樹林下で枝分かれした茎の頂上付近に小さい白色の花を多数つける。高さは大きいもので約 30ｃｍ程度。対馬島内で確認されている自生場所は数ヶ所あるが、シカの食害により年々その数は減少し、絶滅が危惧されている。

第 5 節　国定公園

壱岐対馬国定公園の対馬におけるその区域面積は、全島の約 16％を占めている。

その地域は、リアス式海岸・海蝕崖等海岸の景観を主眼とする地域と、急峻な山岳的景観を主眼にする地域に区分される。前者は浅茅湾一帯、舟志、鰐浦、佐護、三根の各地点を中心とする湾、そして、豆酘崎から長崎鼻にいたる南東海岸であり、これらが国定公園の大部分を占めている。後者は、龍良山、白嶽、御嶽等の原始林を擁し、内陸部に点在している。いずれも対馬の自然を代表するものであり、主要な観光資源でもある。その優れた景観を保護し、かつ利用するため、国は昭和 43 年 7 月 22 日、地元住民の要望と県の要請により国定公園に指定した。国定公園は地域の重要性に応じて、普通地域、特別地域、特別保護地区に区分されており、保護調整を図るために、それぞれの区域内における工作物の新築、木竹の伐採等の現状変更に関しては、その区域により、その行為の前に届出や協議を行うか、申請を行なって許可を得る必要がある。

第３-３表　壱岐対馬国定公園区域面積

（単位：ヘクタール）

区分		特別地域					普通地域（陸域）	合計（陸域）	海域公園地区
		特別保護	第一種	第二種	第三種	小計			
対馬市	厳原町	64	19	648	585	1,316		1, 316	10.4
	美津島町	23	685	3,224	1,337	5,309	103	5,412	9.5
	豊玉町	20	74	1,192	70	1,356	84	1,440	
	峰町			86	107	193		193	
	上県町	145		1,061	11	1,217		1,217	
	上対馬町		11	1,017	533	1,561	16	1,577	
	対馬計	252	789	7,228	2,683	10,952	203	11,155	19.9
	面積割合（％）	0.36	1.11	10.20	3.79	15.45	0.29	15.74	
壱岐市	郷ノ浦町		33	222		255		255	
	勝本町	37	69	137	41	284		284	18.3
	芦辺町			37	137	174		174	
	石田町		8	63	7	78		78	9.3
	壱岐計	37	110	459	185	791		791	27.6
公園区域計		289	899	7,687	2,868	11,743	203	11,946	47.5

※平 14. 6. 14、指定書及び公園計画書による